愉しい話

突然、息子から郵便物が届いた
一年前の春、突然アパートから姿を消した息子から。
私は急いで妻を呼び、封筒を開ける。
すると、中には一冊の写真集が入っていた。
ページをめくるたび、妻の瞳からはらはらと涙がこぼれ落ちる。
私も、ページをめくる手のかすかな震えが止まることがなかった。

愉しい話

遠い、いつかみた空想に思いをはせる。
私は、いったい何をしたかったのだろうか。何もない心を見つめてみる。すると、面白いくらいに応えがない。玉のない鈴のように空洞で、いくら叩いても音がしない。
冬が終わり、暖かな春風が大きく吹き、太陽の日差しが穏やかな日が続いているにも関わらず、私は独り家にこもっている。アパートの二階、必要最低限の家具が置かれた十六畳ほどの広さのある部屋は衣類が散乱し、ゴミ箱には固形栄養食の包装袋が溢れかえっている。隅には大きめの段ボール箱が置かれており、未開封の固形栄養食が積まれている。俗にいう汚部屋とまではいかないが、片づかず散らかった部屋だ。
毎日、同じものを食べ、水道水で喉を潤す。それ以外は常に横になって一日を過ごす。何もやる気が起きないのだ。もう、こうなってからどのくらいの月日が過ぎたのかはわからない。ベッドのそばにある窓の、閉めっぱなしのカーテンの隙間から見える世界が、今の私の全てだ。
以前はこんな私ではなかった。そうでないはずだ。
確かめる術も気力もなく、ただ時間を消費する。なんて勿体無い。何かをしなければと常に思うが、思うように体が動かない。動く体力がなく、生命維持に必要な最低限のことしかこなせないのだ。畜生めが！今日も、昨日と同じように、陽が登っては落ちていく様を眺めて過ごすつもりか。ほとほと自分に嫌気がさす。
ほとんど変わり映えのしない景色を眺めているが、ふと気がつくと真っ暗な色にあたり一面が染まっていた。
いつの間にか寝てしまっていたようだ。
しかたがないので、のそのそと重たい体を立たせると、室内の明かりをつけ、少しだけ開いていたカーテンを閉め、大きな段ボール箱から固形栄養食を取り出して食べた。
変わらない味、変わらない食感。ぼそぼそとして、齧るたびにぱらぱらと食べカスが落ちていくそれに嫌悪感を覚え、ゴミ箱を引き寄せる。微かな音をたてながら、なおも落ちていく様子を、ただただ見つめた。
一箱分食べ終えると、途端に喉が渇いてきた。洗うことが面倒で常備している紙コップに、なみなみと水を注ぐと、一気に飲み干した。塩素が強く、たいして美味しくもない水道水。だからといって、外に買いに行く気力もなく、ましてや、ただが水のために貴重な貯金を使う気にはなれない。
会社を辞めてからというもの、貯まるばかりであった金は出ていく一方で、とてもじゃあないが余裕なんてない。狭くてチープな部屋の割には高い賃料を取ってくる都会のアパート、働いていないというのにやたら引かれていく税金や年金、生きるために必要な光熱費などなど。生きているだけでやたらと金がかかる。これじゃあまるで、人生を金で買っているようだ。

全てが嫌になる。
ああ、やめだやめだ。こんなことを考えたって何にもならない。
私の気分が最悪になるだけだ。私は、考えるという行為を放棄する。
そして、食べ終わったあとのゴミを処理したところでふと、風呂に入りたくなった。前回入ったのはいつだったか……おそらく八日ほど前だ。そう気がつくと、途端に自分の体臭が気になってきた。
お湯を張り、風呂場を温める。湯船に入る前には熱めのシャワーを浴び、スポンジで入念に身体をこすり洗う。頭髪も三回ほど洗い、中途半端に減っているトリートメントも使った。私は、なんだかとてもすっきりとした気分になった。気分が上がっているのがわかる。ここ数ヶ月で感じたことのない気分の良さだ。湯船に浸かると、さらにその気持ちが強くなった。
風呂から上がり、せっかくだからと綺麗な寝巻きに着替える。ふと、部屋を見渡すと、その惨状が目に入る。当たり前だが非常に汚い。
すると、なぜかはわからないが、突如として私は非常に気になりだしてしまい、自分でも不思議なことに「掃除をしよう」と思ったのである。
わけがわからない。しかし、掃除をしたいという欲求が抑えられない。正体のわからない焦燥感と義務感に駆られ、恐怖を覚える。そして、この得体の知れない感情を消化するために、私は掃除を始めたのだった。現在、時刻は二十一時。
可燃ごみとプラごみの新しいゴミ袋をそれぞれ広げ、わかりやすいものから分別して放り込んでいく。
燃える、燃えない、燃える、燃えない、燃える、燃えない、燃える、燃えない、燃える、燃えない、燃える、燃えない、燃える、燃えない、燃える、燃えない、燃える、燃えない、燃える、燃えない、燃える、燃えない……
ゴミの仕分けが済むと、今度は流しだ。流しはさほど使っていなかったということもあり、あまり目立った汚れはない。しかし、嫌な匂いがするため、思わず表情筋に力が入ってしまう。
どうしたものか、私にはこういう時の対処法がわからない。
とりあえず流し下の棚を漁ってみると、塩素系の洗剤を発見した。表示を見てみると、排水溝のぬめりや詰まりなどに対応しているようだ。合っているかどうかはわからないが、なんとなく解決するような気がしたため、使用した。十五分ほど放置するらしく、その間、私は別のことをすることにした。
部屋は、床に落ちているゴミは無くなったものの、選択せずに脱ぎ捨てられた服や段ボール、過去の書類などが散乱している。掃除機を早くかけたいが、これらをどうにかしなければそれは叶わない。
まずは、散らばった服を適当な段ボールに集め、洗濯機に放り込む。次に、書類を一つの段ボールに集め、シュレッダーにかける。最後に、ダンボールを全て解体し、紐で縛り上げた。案外、ダンボールの処理が面倒だった。これまで、固形栄養食をネット通販で購入していたせいで、段ボールの数は十をゆうに超え、城のごとく部屋の隅にそびえたっていた。むしろ、今まで全く気にならなかったことが不思議なレベルだった。あいた口が塞がらない。
そうこうしているうちに十五分以上が経過。私は慌てて流しに行き、水で洗剤を洗い流す。すると、先ほどまで感じていた不快な匂いが軽減されたような気がする。あまり自信がない。
そして、最後に掃除機をかける。抜け毛、食べかす、段ボールから出た粉、紙片や埃など、不愉快なものが全て、大きく唸り声をあげる掃除機へと吸い込まれていった。しかし、掃除機をかけた後に何か物足りなさを感じ、掃除中に発見した取手付きの床拭きで綺麗に拭うと、ようやく満足した。現在、時刻は二時半。
おかしなことに、私の衝動はここで止まってはくれないようだ。
私は、筆笥からしばらくきていなかった綺麗めな服を引っ張り出して着替えると、リュックのような肩掛けカバンに財布、通帳、固形栄養食二箱、携帯電話、モバイルバッテリー、身分証、そして、昔買ったちょっといいカメラを入れる。準備が整うと、私は外界へと飛び出した。
海が見たくなったのだ。

























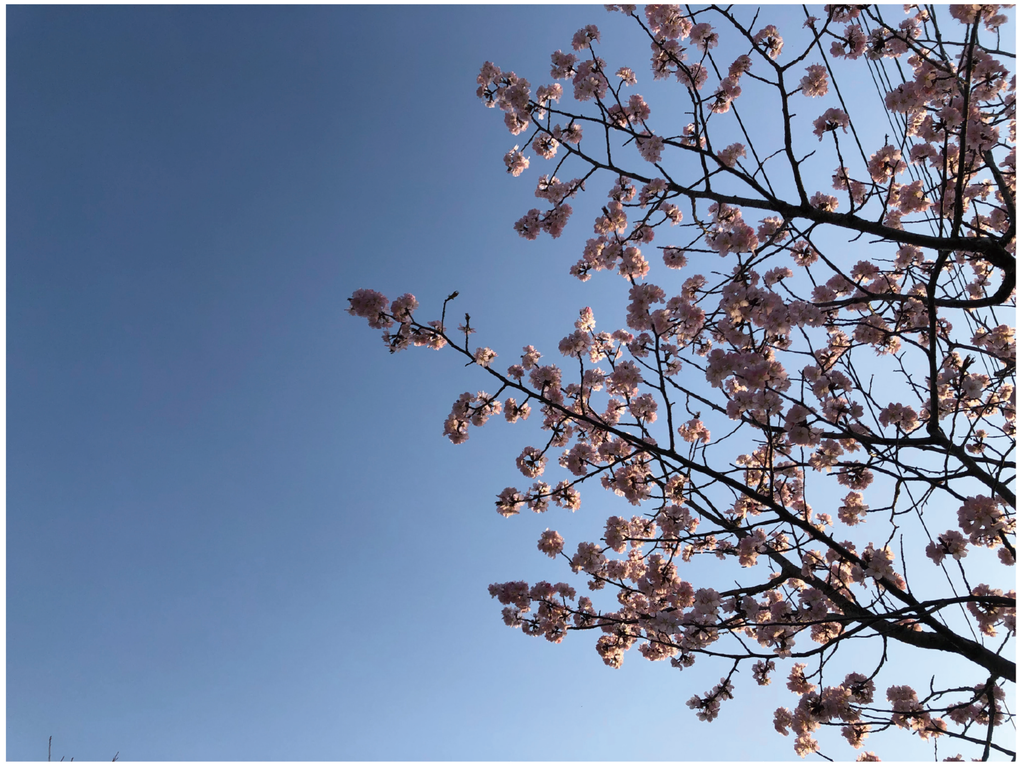





















大宮
おおみや
470


海産
世界屋
ここ
極上本まぐろの店
笠地すし一番
椎名










止まれ




















ここまで



















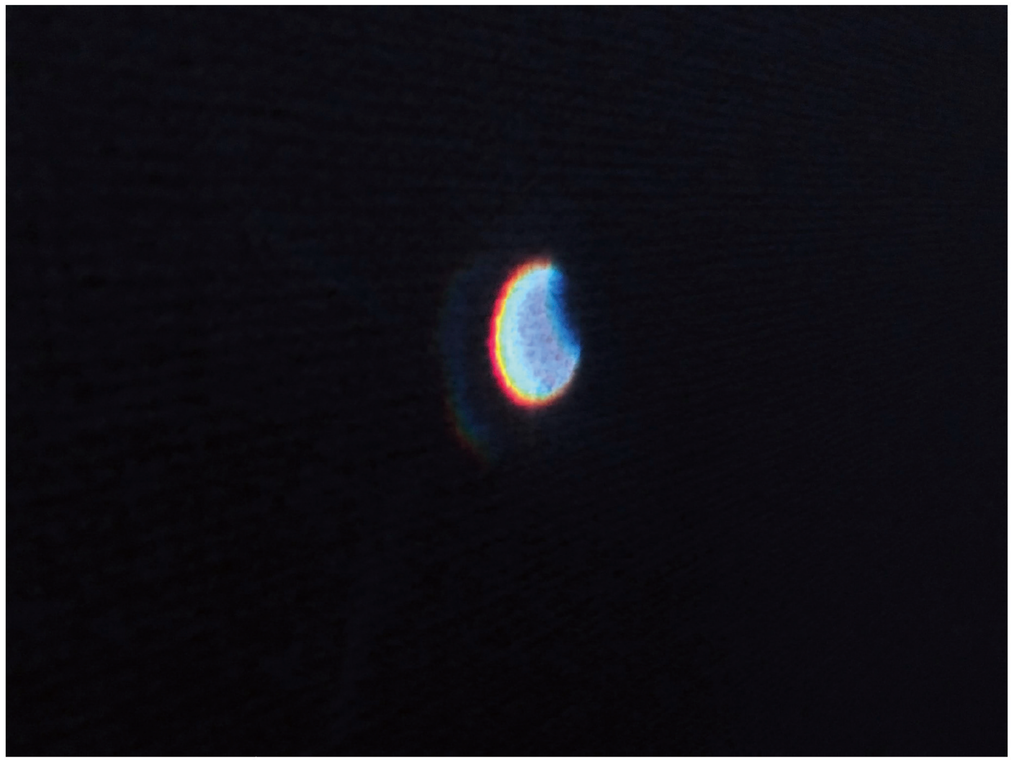









14
































押しボタン式
自動車・原付
:00−8:30


注意















なかなかどうして、旅とは楽しいものか。

何も考えずに衝動的に飛び出したあの夜は、まさに奇跡と呼べよう。

行き当たりばったりで、どこの海を見にいくかも決めていなかったために、気分に任せてあらゆる寄り道をした。そして、その度にシャッターをきった。

途中、親や兄弟、友人からの連絡が来たが、煩わしくて全て無視した。その甲斐あって、私は自由を満喫できたのだ。

「私の人生とは何か」

この問いの答えをずっと考えてきた。そして今、私は答えに辿り着いた。

眼下には、白波を立てて奏でられる穏やかな潮騒。

朝日を反射してなお、海の深い藍色が広がっている。

早朝の冷たい春風が、塩の香りを運んでいる。

伸びた私の髪が、愉快に舞い踊っている。

ああ、悲しむことなかれ。

来世もきっと海になる。

半年後――――。

私は筆を持って絵を描いている。
息子が撮った写真をもとに、絵を描いている。
奇跡をなぞるかのように、ただ、絵を描いている。

愉しい話

初版発行　二〇二六年　二月六日
著者　真実
連絡先　uzuramushi406@gmail.com
印刷所　しまうま出版

